深窓秘抄

和装本
ケ 5
44
56

宮内省圖書寮

春

ひとよ

きのふこそはるはきぬなれ
みるまにやたちまちあらまし
ふるみね

たちぬいたるあやをりの
やまもうもれみくけをはゆむ

紅葉山文庫

一伝神書

ふしのやとかこそねの声ゆとうとくゝ

ちとせはすの表みれしらのはるら雲

はるゆき

あさひさしをなのよやとあれとそはる

はやつむらちよ成さほうらはあり

うねあ

あさひさす表みねのゆきむらそえて

ちとせはのゆみはなひきよけあ

中務

うゝひものゝ侍ふのあとはゆき高ね

やまさゝいのゝ中はるをうらよゝ

みぢを

うきとめて たれをたちたつ むめが香の
あやなつかしみ ちぢなくさ
八ね

むめのはなうつれとみえぬさくらあ
あちきるゆえ のれてくる石ぶみ

あうひ東

わかの浦うまみをんなをりひ出の乳
うれしとみる 浦ゆきの石ぶみは
むねゆき

東きはるまつをみどりとそそ紅
いまの花ぶ ほのぶえ一ゆさりなわ
ふみね

やうのもとんくさはもえなんかまこのを
きくはるのひまもまつ紅葉くさなり年
ゆすてみぬひとをのつとはるまくれ
こうみ可ゆめる物うるなり色
ぶみ

はのひまるれつはこまつのなりをは
ちよの春めまふよ色ふ
よのそ

ちよをまく比きもまつ紅葉はは
きみをりひ、うれくうほもや色
なうつかき

いそのみるまきみやこぶよる見れば
むつかしきこと思ふもの
みつれば

やまぶきみるまきみゆるけらむも
こころの極まくさらぬひとるの
どのねもり

やまぶきこころあらいろをみつるまれ
をしもちるつくもものをふるねるに
うを

みてのみやひとるたらむやまぶきら
ちるとるをもあくいつはとるきむ

葉平

おのなつかしてあくがれのさのはは
はるのこころはのたのうらまくく

みつね

わかやどのそなみのそらとぶは
ちりなむのちうらとうてうまつ

義山院

こ歌ものを書きみて次第のおのつ
ゆ数みるひとなりなりなれ

やうもち

そほのにあやうきまくまのつまなよ
おのありこをひとりしてて

一條摂政

梅一はちるまや雪のなごみなむ
伊勢はなのうむ〻うらら志
小野
ちり散るまきさ〻ほきさるまはよ
きなるみくうひとあきれむ
ほらゆ紀

さくらちるこのたうをはさ雲うら
てうるゝられぬゆきうふりしる
同上
きなるみふちりぬるやとはゆはるの
ふ雪ま東こ接なりぬてうな礼
みはね

雲のみとはる音お宮はぬきてよ

ぬたつことやまそよたなのこのけのそ

夏　久来廣庭

竹ふいまて野ふかくんあひよの

やまほくきあひくもなを

石忠

ゆるやらくやゆたくほくきす

いもひくこのきかまのさる

くみ

さよたてねもあさりをはあくます

ひとつくまくにきつのあけれ

もたのた

東をつくかるひるわすれや夏さの
うとゝえおそすまさきろ半の花
かねそり
みやまいてゝらはるやきうぼたき
次ふつゝみかたゝ結こゝろのきゝゆふ
あまそゝの夏さ

さつきやみ松ほつゝれよりたゝきぬ
なれふほゝゝ点のいなはたらあく
同花
なつのさをはあるあをあをひおよ
ひゝはものをやゝ移ぬはさゝあをを
雪之家

梅ぞこゝろあらん袖ぞ
宿るはふるさとの（ヒ）ひとはいかゞ梅のか

秋　　あき貞子

あまたゝびいくもあらねどこのあるを
いかゞ思ひのかぎりはまもるも
なるらんかさ

恋歌の終かはしまるゝ面なはは
多はあるべきの義をなほやうはは

つらゆき

あるさくのをきのしもみつたみて
いかゞ　ひむらに雪もちりぬ冬

道之咸

我たつ又のこゝ海ほとりにて

きゝのふくりみ此こゝ毋ゝ詠ふ

伊勢

こゝつたきゝ雲こゝたゝ立ゝ又秋はゝを

ふれぬこゝろ有もおもゝ侍ゆゝ

無名

我こゝろふかほゝとるものゝこゝなはゝ

みわゝやわゝうゝのゝたゝてゝうゝ

よゝのふ

もみちゝぬゝきはのゝやまゝもゝしは

松の道なゝこゝやあゝまゝこゝろん

義孝朝臣

あるはなほしらなみそこうちはゆる
をちのうはかをほのしらつゆ

芝居

さゝなみやもりはどゝをほとゝの
やまもりくゝれあまのよつよ

しらなみ

みつのおもはくるつよなみをうつふれる
こゝろひろあまはふうふりなる

あつまの中仙こ

うわるくときゝ人のみゝをぬれた
わりのうあるとまもよきとうたもふ

ちゝもふ

かたらまあの弟もとこめてたちぬれば
そらよりあまのやどはみえけり

ゆきのもり

ゆきされをさほのうはらにはきりは
あもまきしはをるちりなるかわ

きよまさ

むらのうちきとうみるはむやまの
きとうもみちそりそぬまは

立花

ほのとあわしのつまたきこのたよ
もみちおよおろすやまおろのかを

ひまん

あまのはもみはるかつきの
やまのあなをふまうしらし
うねり

ながくゆくあまのたなかくこのは
わのそこゆびのしそよそありける

八束

やまさくらあきもうれぬをうるの
ぞたまのはくるとおくるあさつも
つゆあき

みるひもなくてらぬるかたもの
ぞうちはまるのきりたりなわ
みつね

こゝろあてなるほやすむしはつ
その杉よまつはきる――まさの氣

世名

よをさむみ秋とあてきたるほをうゑ
なくこゑひとつあまをかたるを
おもふうら

らがやうかのうまはまりうるゆうな
――るものはまのうさの成ふりけり

世名

みやまより急あり雲ふるら雨方
敢流方さ雲の――ろいろつよるを
ほゝゆき

おもひのねに者の東極まで尋ぬるに
ゆくへもしらぬ雲のなかれ東
ゆくへのさとをむすびとめ
こゝろのうちのうれしさ
きみよりの雲のつゆはきるらん
ふりもてくるなみ
たゝぬ

雲義乃雲ふるらんやまおろし
なわ雲ほうぼうとなる毎わつて
こゝろの雲もり
こゝろふかきわうみよりまとまるとつゆを
雲
雲わむしつゝなるのいろくもむ

みつね

わかうゑしゆゑにうんしてはてもあり
あるをこのきりとおもはるるに
ひとをもたのみはわひつも
なをふかにたりたるまいをつまのを

そきい

〜ものをんといひてそわになるうまの
あわにのつまをまちくらするる

三名

むさしのゝやみのうつはさあ影ら
ゆめはかりもまちはりなを
なりひら

たのもつてあそてとしをふつるあふ
ふあはしらをしひらそらしらなみを
雲井
与謝野乃海やふみ野をのつらを
草の葉乃せ海乃波乃はるかなる
頌忠中納言

高砂こそ乃為あく能成をかをふ
北東壹我者海をふみあらあく
敦忠中納言
あひみてのちの心乃ひとをなそむ
かしものを於もはさりけるを
ひとまろ
しのめつゝふるあらなりぬれを

まだくおもふ

つゆ方つまもき社る

つゆゆき

あひとをうらゆまもちつひさうたの

つまをあらはいたぬようなる雲

しらゆき

う野をいろみ竹

みれはうたくをのをおもふふるの風

ひとまえ

あしひきのやまとりのをのしだり尾の

ながのしらほをひとりぬる夜哉

雜

海のうへあのしら乃うのあきりよ

しまのうれゆくあきしらなみ

海松

なのふうのをれるくたてつむあまをらか

こきゆくふねのあとのしらなみ

赤人

わかのうらにしほみちくれはかたを
なみあしへをさしてたつなきわたる

無名

たをりなはいくよろなきはきよよをとる
みよはのとつみちさらはくなれ

仲丸

あまのはらふりさけみれはかすかなる
みかさのやまにいてしつきかも

をのゝたかむら

わたのはらやそしまかけてこきいてぬと
ひとにはつけよあまのつりふね

是上　清製

ゆふされはみふとやのしわたるは

のりをあるうけるはつみぶか

雀みやうの

よしゝあくまあくまあるまうまうまわ

北ゆきて、そうもんへうりけう

蔵照和

きみのもむやうのゝまゝのゆくえく

うまくもこのつゆみしれ

中務

わをうれくしうまうまうもほんの船

いつはるみをゆゑなれくみむ

魚照信

ものつゆやよのふのの

おうゝれまたつるあなるむ

並輔中納言

ひものおやれしろはやみよあゝねん

こゑおとろふみたるまくひぬるの風

京こさめ

このねみぬのまつうきかふなり
いつれのをりしとうめ花

直玲

おもひやるはるはをはをを
なるへふちんみぬのうもも
そとはね

ひとつのはるのわれをあそれん
ひとをおそるる心をはりなる

仲久

あり何者のはるのひをまつほそり
わるのいろをゆくこの風

小大君

いそしのよるのちきりたえぬ

あらしのまにまにうつるきのくみ

白女

いのちなをしろまのなをしるはなし
なをしるわれのかなしのうつよ
わもり

よもあらはみもやこいそつまや
もしぶらしらはのきはこえあと
そらあらし

ゆふさるさとひはとらまくよ
しもとのもしわきをまつらん

みちのふのゆは

うまもあれなとしぬよをそつらしも
そそなをよのはふをなりしわ

たのみつのゆは

はなをつをたりひしるものなをを

うらやましくもあるつまさかれ
ゆん女

おくれゐてなからむよりはあしこの
なさけのちとせゆつらせりにむ
あ浪

あまたあるはらからひとつのみのあひおもひをと
おんつはひさし、まちみよしのよろ
倩女氏

うらみつゝひとりぬるよのあくるよはいか
にひさしきものとかはしる
以恒

みわのやまいかにまちみん
としふともたつぬる人も
あらし

東杉亀契筆

[illegible]

わかるまみはちるもゆ

千代まつ

[illegible]

いろ[illegible]

右深窓秘抄一卷其名見於後拾遺和哥集序及八雲御
抄和哥色葉集諸書又並以為四條亜相藤公所輯而
世無傳本人以為憾適有奥客持来此卷以示余謂其
家珍藏已舊相傳公所手書也余驚喜不置遂借閲
之和哥計百有一首率皆清遠流麗視諸金玉集大同
小異體製相若其出一手可知也且筆致古逸大有晉唐
風格又聲之相近者不綴假字亦非後人所能也公薨八百
年其遺跡傳世者極少今獨存此墨寶豈賴鬼神呵護
乎所謂平假字者蓋起於近暦間亦来能書家兼善

此體公之擅技當時必有傳其妙訣者焉往日所刻古今
集零本稱為紀氏真蹟其結搆連屬與此相類雖然
波則殘璣斷璜固不若此完璧之為愈也余仍謂假
字之書當以此卷為今古之冢乃倩於本望雲勾勒上
木以布四遠古之學假字者矜式於此則其於古法思過
半矣天保己亥清明吉田敏成題

小鳥知足書

弘化三年摹鸞嘯閣